

顔文字をいつ使用するかについての語りとその質的分析

荒川 歩

同志社心理No. 51. 2004抜刷

顔文字をいつ使用するかについての語りとその質的分析¹⁾²⁾

荒川 歩

Narratives of using emoticons and its qualitative analysis

現在、多くの若者が携帯電話のメールにおいて、(^_^)や(><)といった顔文字を使用している。若者による、このような顔文字の使用については多くの研究者やメディアがさまざまな解釈をしてきた。しかし、使用する、あるいは使用しない本人たちの解釈はどのようになっているのであろうか。

携帯電話の画面という現場^{フィールド}と顔文字

三宅(2002)は、女子短期大学の学生に対して質問紙調査を行い、携帯メールを一日に6通以上送る学生が80%近いこと、伝達する内容は、「出来事の伝達」や「あそびの誘い」、「私的な相談事」、「気持ちの伝達」、「待ち合わせの連絡」が多いことを報告している。また、都築・木村(2000)も、メディアコミュニケーションの心理的特性についての研究の中で、被調査者の98.02%が携帯メールを利用していることを報告している。この数cmに満たない現場^{フィールド}は、現代の大学生にとっては、重要なコミュニケーションの場であるといえよう。

この現場^{フィールド}で用いられる非言語的な記号の1つに顔文字がある。携帯メールのような非対面コミュニケーションメディアでは、表情やイントネーションといった非言語情報を捉えることができないため、感情の伝達の困難さや、行き違いが起こる危険性が指摘されている(Kiesler, Zubrow, Moses, & Geller, 1985; Rice & Love, 1987)。顔文字はそれを補うための重要な非言語

情報となると考えられる。

顔文字についての先行研究

顔文字についての心理学的な研究は、付与されている顔文字の種類によって受信者が受ける印象の違いについての印象評定研究(戸梶, 1997; Walther & D'Addario, 2001; 中丸, 2002; 竹原・佐藤, 2003, 印刷中)、実際に使用された顔文字についての顔文字の種類^{フィールド}の分類研究(井上・藤巻・石崎, 1997; 戸梶, 1997; Witmer & Katzman, 1997; 山口・城, 2000)、どのような状況下で顔文字が用いられるかをコンテキストの分析や実験的手法によって行う使用背景の検討研究(Rivera, Cooke, & Bauhs, 1996; 荒川, 2004)の3種類が主に行われている。

しかし、性差(Witmer & Katzman, 1997; Wolf, 2000; 村瀬・井上, 2003)や年代差(中丸, 2000)が報告されているにも関わらず、なぜそのような性差や年代差があるように見えるのかについての研究はほとんど報告されていないと思われる。この原因には感情研究や非言語研究において潜在的に存在する「表情は感情の表出されたものである」、あるいは「非言語行動は何かを人に伝えるために存在する」という、非言語行動の動因(感情や伝達の必要性)と発現を単純に結び付けた因果モデルの存在がある。この因果モデルによる問題の過剰な単純化の結果として、男女という属性の差ばかりが強調され、その背景にある構造の違いの検討が不十分になっ

¹⁾ 本研究に当たり、日本学術振興会 人文社会科学振興のためのプロジェクト事業『ボトムアップ人間関係論』の構築、および科学研究費補助金「フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法」(課題番号16330131)の援助を受けた。

²⁾ 本研究の計画・データの収集・分析は、立命館大学大学院文学研究科の中谷嘉男氏と共同で行った。この場を借りて心から感謝をいたします。

ていると考えられる。

社会言語学における発話スタイル概念の非言語・顔文字研究への応用と本研究の目的

このような単純な因果モデルを超えるための理論的枠組みとして、荒川（準備中）は社会言語学において用いられる「発話スタイル」(conversational style) (Tannen, 1984) という概念を援用することが有用であると指摘している。この発話スタイルとは、個々のスピーチコミュニティにおける成員の会話の仕方として定義されるものであり、前述の因果モデルと違う点は、非言語行動が全くない「ゼロ」が基本レベルとして設定されるのではなく、それぞれの属する規範に基づき、ある程度の表出が行われることが基本レベルに設定されている点である。つまり、この発話スタイルを援用したモデルに従うならば、顔文字がどの程度使用されるかはそれぞれの規範に基づいて決定され、感情や伝達の必要性は発現の契機に過ぎないと考えられる。

そこで本研究では、人が顔文字の使用に対してどのような規範をもち、その規範に基づいてどのような判断をして顔文字を付けるか否かを決定しているのかを明らかにすることを目的とする。

従来の研究法の限界と本研究の方法

個々人が持っている社会的規範が人にどのような形で影響を与えるかは、「要因」や「交互作用」といった単純な概念で理論的に構築して検証できるものではなく、“こういう場合には”といった「条件」と「要因」がダイナミックに絡まったものであると考えられる。よって、何が条件となるのかがわかっていない現段階では従来の量的・仮説検証型の実験においては十分な検討が不可能であろう。そこで、本研究では、モデル生成的(やまだ, 1986/1997)な質的分析を用いることで、どのような人がどのようなときに顔文字を使うのかについてモデルの構成を行うことを目的とする。

質的研究法は、社会学(佐藤, 2002)や心理

学(無藤・南・サトウ・やまだ・麻生, 2004)だけではなく、工学(塩瀬・加藤・片井, 2004)や医学(斎藤・岸本, 2003)、看護学(Leininger, 1997)などで用いられている技法であり、サトウ(2004)は、Flick(2002)や西條(2003)を引用しながら、質的研究の特徴の1つとして、仮説の検証ではなく構成を、客観性ではなく再現可能性・反証可能性を、信頼性ではなく確実性(手堅さ)・監査可能性を、内的妥当性ではなく有意味性・真正性を、外的妥当性ではなく転用可能性・一般化限定性で評価する点をあげている。

調査的面接という技法の可能性と限界

質的分析にもちいるデータの取得法として、本研究では調査的面接を用いる。調査的面接については、面接において語られたものが「本当のこと」を語っているのかなど問題点が指摘されており(高橋, 1993)、また、メディアや専門家が作った解釈が普及している場合には、その解釈が調査協力者に影響を与えてしまう可能性は否めないという限界もある。しかし、質問紙などでの自由回答では“なんとなく”などと表面的な回答に終始してしまう可能性があるため、その人に合わせてより深い質問を行うことのできる本研究の目的には合致していると考えられる。

また、鈴木(2002)は、調査的面接の利点として、「確実性」、「コミュニケーションの正確さ」、「応用性」、「臨機応変性」、「包括性」、「自然さ」、「情報の多様性と豊かさ」を指摘している。特に、使用に関する条件の構造がまだ十分わかっていない現時点においては、相手の回答に合わせて聞き方が変化する「臨機応変性」や「情報の多様性と豊かさ」は有用であろう。

方 法

調査協力者 大学生・大学院生14人(男性7人;女性7人;年齢は21歳~24歳)。調査協力者は調査者のどちらかとあらかじめ面識があった。参加者には謝礼として500円が支払われた。

手続き 非構造化インタビューを行った。インタビューは1人のインタビューイーに対して、2人のインタビュアーがつく場合と1人のインタビュアーの場合とがあったが手続きとしては同様であった。事前に設定されていた質問項目は「顔文字を使用するか否か」と「使う状況と使わない状況の使い分けはあるか？」の2種類だけであり、必要に応じて「メールの顔文字について他の人から何か言われたことがあるか？」などの問いも追加された。一人当たりのインタビュー時間は5分から10分程度であった。なお、インタビューは事前の許可を得てMDレコーダーで録音された。また同時にインタビュアーはメモを取った。

結果および考察

分析 録音されたインタビューの内容はすべて起こされ、発言の意味のまとまりごとに区切られた。まとまりは合計118個になった。これらの意味のまとまりを調査者2名が話し合いながらKJ法(川喜田, 1967)を用いてまとめた。KJ法の結果、小カテゴリは28個、中カテゴリは22個、大カテゴリは9個になった(Figure 1)。また、それぞれの小カテゴリの代表的な語りをTable 1に示した。

以下では、いくつかのテーマに分けて大カテゴリについてそれぞれ説明を行う。

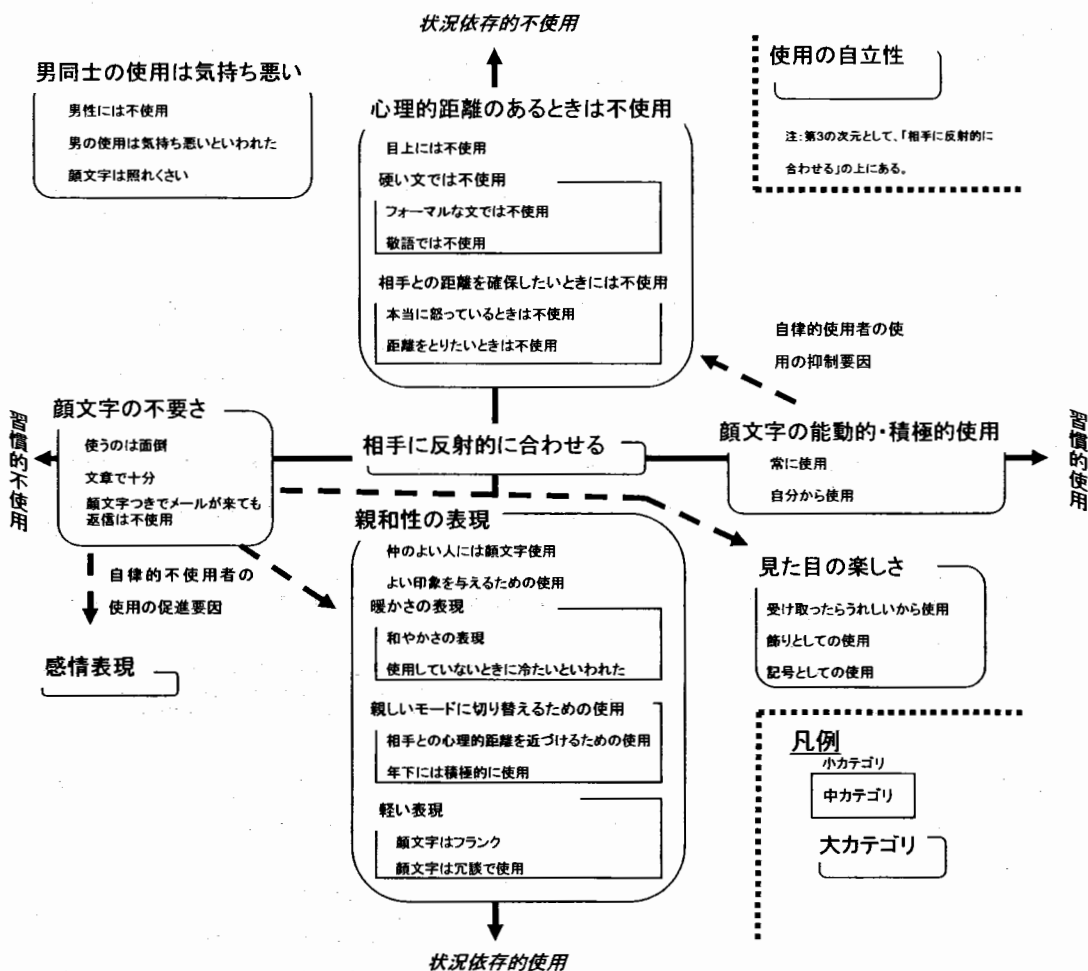


Figure 1 顔文字の使用についてのKJ法の結果

Table 1 各カテゴリに含められた代表的な語り

●使用の自立性	“自分が使いたければ使うし、でも疲れてきたとか、あんまりずっと続けててとかだったら使わない、自分から使わないことはありますねえ。”
●心理的距離のあるときは不使用	
○目上には不使用	“どんな関係の人でもと言って、目上の人にはあんまり使わないですけど…”
◎硬い文では不使用	
○フォーマルな文では不使用	“まじめな話とかしてて、そんな顔文字とかはいらんのじゃないかなって。”
○敬語では不使用	“敬語に対して顔文字っていうのがちょっと合わない気がする。”
◎相手との距離を確保したいときは不使用	
○本当に怒っているときは不使用	“ほんとに自分が怒ってるときとか、いいたいことがあるときとか、その人との関係がちゃんと出来上がってるものであって、なおかつ怒りとかを言いたいときにはあんまり顔文字を使わない。”
○距離をとりたいたときは不使用	“異常に馴れ馴れしくしてくる相手だとこっちは顔文字を控えるとか…”
●相手に反射的に合わせる	“こっちらから送るときは僕はほとんど使わなくて、向こうから送ってきたときは、例えば笑いか使ってくると、こっちも使おうかなって感じてつかうかな…。僕個人としては、自主的に使うってことはない。”
●男同士の使用は気持ち悪い	
○男性には不使用	“男に対して使う事はほとんどなくて、相手が女の子だったら使うかもしれないかな…”
○男の使用は気持ち悪いといわれた	“顔文字あんまり好きじゃないって言う人もいるんで、…中略…「男で顔文字使うの気持ち悪いやん」とか…中略…同性にも異性にも言われたことあるし、他人が喋ってるのも聞いたことあるし…”
○顔文字は照れくさい	“基本的に使わないのは、いちいち使うのが照れくさいって言う…”
●顔文字の能動的・積極的使用	
○常に使用	(質問者: 顔文字はどういうときに使いますか?) “どういときに? ほぼ使います。”
○自分から使用	(質問者: 最初に自分から使って送ることはありますか?) “はい、送ります。”
●顔文字の不要さ	
○使うのは面倒	(質問者: なぜ使わないんですか?) “(顔文字よりも)「。」とか「!」のほうが、入れるのが楽だからですかね…”
○文章で十分	“顔文字って言うので表現しなくても文法的に伝えればいいことしか送ることがない。”
○顔文字つきでメールが来ても返信は不使用	(質問者: 友達から顔文字付きのメールでかえす? 返さない?) “普通につけないで返します。”
●見た目の楽しさ	
○受け取ったうれしいから使用	“自分が顔文字入ってるメールをもらう方がうれしいし楽しいって思うから自分も送る。”
○飾りとしての使用	“やっぱ文章だけだとどうしても淡白な感じがするので、ちょっと飾りみたいな感じでつけますね。”
○記号としての使用	“普段はとりあえず使わないんですけど、使おうと思ったとき、まあ、なんとなく、ただの記号的に使っている。”
●親和性の表現	
○仲のよい人には顔文字使用	“メールからホントの気持ちを読み取れるぐらいの付き合いの深さがある人には使いたいですか…”
○よい印象を与えるための使用	“いい印象を与えるように、断りづらくする、じゃないですけど、断られないためにするためだと…”
◎暖かさの表現	
○和やかさの表現	“なんか、場を和ませるっていうか…。書き込みやすくするって言う、感じですけど。”
○使用していないときに冷たいといわれた	“これは一貫して女の子に言われるんですけど、顔文字入れないよね、冷たいよねとかって言われるので…”
◎親しいモードに切り替えるための使用	
○相手との心理的距離を近づけるための使用	“年下の人が顔文字なしで送ってきたときは、気を遣っているのかなって自分で思うから、私から使うことによって、そんな気使わんで良いよって感じにさせるようにします。”
○年下には積極的に使用	“年下とか、年下の人メールすることってあんまりんですけど、年下やったらこっちらから入れたりとかする場合もある。”
◎軽い表現	
○顔文字はフランク	“顔文字っていうと、インフォーマルっていうか、あんまり、砕けた感じがやっぱりあるので、仲間内だけに通じるっていうんじゃないですけど…”
○顔文字は冗談で使用	“(普段は使わないんですが)すごく親しい相手には、冗談半分で、顔文字とかも使ったりしますけど…”
●感情表現	“なんかこう、文字だけだと、文字だけ伝わってみたいイメージがあって、気持ちがあまり入っていないような、うれしいのに「うれしい。」やと向こうはホントにうれしいのか疑うかもしれないんで、プラスアルファとしてみたいな感じですかね。”

注: カッコ内は、意味がわかりやすくするために引用者が言葉を補った部分である。

相手との関係と使用の可否

Figure 1 の縦軸（状況依存的な使用と状況依存的な不使用）を形成するカテゴリとして、「距離のあるときは不使用」と「親和性の表現」および「相手に反射的に合わせる」というカテゴリがあった。「親和性の表現」は、「暖かさの表現」や「親しいモードに切り替えたいための使用」、「軽い表現」、「よい印象を与えるための使用」といった中小のカテゴリから形成された。他方、「距離のあるときは不使用」は、「フォーマルな文での不使用」や、「相手との心理的な距離を確保したいときには不使用」や「目上には不使用」といった中小カテゴリから形成された。

以上の2つのカテゴリから、顔文字の使用が対人関係や状況の判断や調整に大きな役割を果たしていることが読み取れる。顔文字は、親疎の待遇表現であるのに加えて、相手との関係を調整する役割も果たしていた。たとえば、以下のインタビュー（引用1と引用2）が示すように相手により自分の近くに引き寄せるときには使用され、逆に、あまりにも親しく振舞いすぎると相手や、相手に対して本当に怒っているときには顔文字を使わないことで相手との距離を広げようとしていた。少なくとも顔文字を日常的に使用する人にとっては、顔文字を付与するかどうかは相手と自分がどちらのモード『親しいモード』か『他人行儀モード』か、あるいは、『和やかモード』か『緊張モード』かを提案し、維持するものであると考えられる。

引用1（Bさん）

インタビューアー（以下、Qと表記）：女性とかとメールするときと違って結構ついてきませんか？

B：ついてきます。

Q：そういうのはちゃんと顔文字つけて返す？

B：時と場合によるというか…。

Q：なるほど。時と場合によるというのは？

B：特に深い意味はないんですけどねえ、異常に馴れ馴れしくしてくる相手だとこっちは顔文字をひかえるとか…。

Q：思っている以上に親しいフリをされると距離をとるために、みたいな？

B：はい、顔文字を使用しない。

引用2（Iさん）

Q：年上から（顔文字）なしで来た場合には、（顔文字）なしで返す？

I：はい。

Q：親しさとかは関係なし？

（一部略）

I：なんかちょっと…ふざけてる観、っていうか、ふざけているような感じかな、と思って…。

Q：でも、こう、顔文字を使うときってふざけてるって限らないですよね？

I：はい。年下の人が顔文字なしで送ってきたときは、気を遣っているのかなって自分で思うから、私から使うことによって、そんな気使わんで良いよって感じにさせるようにします。

「親和性の表現」と「距離のあるときは不使用」の2つは、自発的な使用・不使用についての例であったが、「相手に反射的に合わせる」という大カテゴリも存在した。「相手に反射的に合わせる」は、引用3に認められるように、相手に合わせて使うかどうかを決定するとした発言を含んでいた。

引用3（Hさん）

Q：顔文字って使いますか？

H：こっから送るときは僕はほとんど使わなくて、向こうから送ってきたときは、例えば笑いか使ってくると、こっちも使おうかなって感じであらうかな…。僕個人としては、自主的に使うってことはない。

引用4（Jさん）

Q：相手から送られてきたら使うのはなぜ？

J：入っているからというのが…あまり答えになってませんけど…。

Q：向こうから入っているからこっちも？

J：つられてみたいなところがありますね。顔文字と絵文字ってあるじゃないですか？で、特に、絵文字とかの時は、会社とかで送れなかったりするんで、絵文字が入ってたら、あ、使えるわ、そういえばこの子。この子に対しては、同じ会社だから使えるから、っていうのを思い出して、送る…みたいなところはありますね。

Q：顔文字のときは、なぜ、向こうから送られてきたら、こっちもつけて送るのか？

J：えー、なんだろう…。あんまり考えたことないですね…。同調みたいなのところがあるかもしれないですね。

Q：同調って言うのは？

J：使ってるから、使わなきゃな、みたいな、使い返さなきゃな、みたいな…。

発話スタイルに関連して、三牧(2002)は、同等な立場の二者間の対話において、同一の発話スタイルが常に選択されるという実験結果から、「社会的に同等の相手には、同等の丁寧度・同一スタイルで話す」という規範があることを指摘し、個人的なストラテジーとして、相手に合わせることの有用性を指摘している。このことは、「相手に反射的に合わせる」もまた、有用なストラテジーであることを示すと考えられる。

また、社会言語学の分野で、親疎関係に深く関わるポライトネスについて Lakoff (1990) は、3つの丁寧表現を指摘している。1つ目は、礼法(距たりを保て)であり、2つ目は、敬意(相手に任せよ)であり、3つ目が親愛(相手の気持ちになれ)である。これは、それぞれ本研究で得られた「心理的距離のあるときは不使用」、「相手に反射的に合わせる」、「親和性の表現」と対応している。Lakoffも親愛の丁寧表現が、相手との心理的な距離を縮めようとするために用いられることを指摘している。

自立的使用・自立的不使用・従属的使用

前述の「相手に反射的に合わせる」とは反対の意味を持つカテゴリとして、「使用の自立性」というカテゴリが形成された。これは、Figure 1の左右の軸(習慣的使用と習慣的不使用)を形成する、「顔文字の能動的・積極的使用」と「顔文字の不要さ」というカテゴリとも関係すると考えられる。この両カテゴリとも、「自分から使用」や「顔文字つきでメールが来ても返信は不使用」といったように、相手に依存せずに自分で使用する・しないを決めているというカテゴリを含んでいた。

以上のことから、顔文字の使用に関して、主に3タイプの人がいると考えられる。第1のタイプは、相手が使っていない(状況が許す限り)自分から使うタイプの人(顔文字の『自立的使用者』)、第2のタイプは、相手が使おうと使うまいと必要がない限りには使わない人(顔文字の『自立的不使用者』)、第3のタイプは、基本的に相手が使ってきた場合にのみ使う人(顔

文字の『従属的使用者』)である。

この、自立的使用者と自立的不使用者は、異なる発話スタイルを規範として選択しており、従属的使用者は、両方のスタイルを持った人を尊重することで会話を円滑にしていると考えられる。以下の2つのやりとり(引用5・引用6)は、自立的使用者と自立的不使用者という異なる発話スタイルを規範として選択している人のスタイルのズレが存在することを如実に表している。

引用5 (Kさん)

- Q: なぜむこうが親しくない人やったらこっちから使わないんですか?
 K: 顔文字あんま好きじゃないって言う人もいるんで、気持ち悪いとか何とか…。あえてそんなひとは使う必要はないかな、そういう人の言うてることもわかるんで…。
 Q: 気持ち悪いって言われてる? 言ってるのを聞いたことがある?
 K: 男で顔文字使うの気持ち悪いやんとか…。
 Q: 直接いわれたことがあるとか?
 K: 僕も言われたことあるし、同性にも異性にも言われたことあるし、他人が喋ってるのも聞いたことあるし…。

引用6 (Cさん)

- Q: 何で年上、年下と同年代と分けるんですかねえ?
 C: なんか、よく男の友達から聞くのは、顔文字とか入れないで送ったらおっさんみたいやんけって言われたことが印象に残ってて、あーそーなんやって思ってたのと、これは一貫して女の子に言われるんですけど、顔文字入れないよね、冷たいよねとかって言われるので…(以下略)。

また、顔文字がその人の発話スタイルとして内在化されていることは以下の2つのやり取りにおける“普通に”という言葉が意味することの違いからもわかる。

引用7 (Dさん: 顔文字を日常的に使用している。)

- Q: 親しい男性から顔文字つきで来たら?
 D: 普通に…。
 Q: 普通に顔文字つきで返す?
 D: はい。

引用8 (Fさん：顔文字をほとんど使用しない。)

Q：じゃあ、他の人から、顔文字付きのメールが来た場合、どうしますか？
 F：するというのは？
 Q：顔文字付きのメールでかえすか？返さないか？
 F：普通につけないで返します。

前者にとって“普通”とは顔文字をつけて返すことであり、後者にとって“普通”とは、顔文字をつけないで返すことである。

以上のことから、顔文字の自立的使用者は、メールを顔文字によって装飾することをスタイルとして内在化していることがわかる。中村(2001)は、携帯メールにおける顔文字や絵文字と、若年層において流行した丸文字の類似性を指摘している。丸文字と顔文字の系譜の連続性を検討することができないが、『装飾する』というスタイルが存在する点では共通していると考えられる。

しかし、自立的不使用者は全く顔文字を用いず、自立的使用者が常に用いるというわけではない。両者とも相手との環境や状況によって使い分けている。Figure 1に示したように自立的不使用者にとって、「親和性の表現」「感情表現」「見た目の楽しさ」の必要性は促進要因であり、逆に自立的使用者にとっては、「心理的距離のあるときは不使用」という規範は抑制要因として作用すると考えられる。

顔文字の3種類の機能と発話スタイル

Figure 1の下半分に付置した「感情表現」、「親和性の表現」、「見た目の楽しさ」は、顔文字の機能についての語りであると考えられる。中村(2001)は、現在の絵文字の機能として、①感情を豊かに表現する、②相手の気持ちを和ませ無用な衝突を避ける、③単なる装飾、の3点を指摘しているが、これは本研究で得られた機能についての語りとはほぼ一致している。

しかし、これらは実際には、非常に密接に関わっていると考えられる。本研究では、引用9のように、親和性と感情表現との混乱を避ける

必要があるという語りも認められた。

引用9 (Eさん)

Q：逆に絵文字や顔文字がイメージが悪くなる時、そういうことってあると思いますか？
 E：あると思いますね。
 Q：たとえば？
 E：真剣に謝んなきゃいけないときとか、使わないほうがいいっていうのもあるし、イメージを悪くするっていうのは別問題なんですけど、ほんとに自分が怒ってる時とか、いいたいことがある時とか、その人との関係がちゃんと出来上がってるものであって、なおかつ怒りとかを言いたいときにはあんま絵文字を使わない。
 Q：怒ってることを示したいときに？
 E：そうです、はい。
 Q：使わない？
 E：使わない、そんなんごくまれですけど、普段は少々怒っても、怒ってるけどそれを見せないために絵文字を使うっていうか、あんまり重くとられないように、っていうのはありますけど。
 Q：なんでほんとに怒ってるときは使わないんでしょうね？丸くなっちゃうから？
 E：冗談だと思われるとそれはそれでこまるじゃないですか。

この語りは、2つのことを示唆している。第1は、顔文字は前述の『和やかモード』または『親しいモード』で主に感情表現を担い、顔文字の不在は時に『緊張モード』または『他人行儀モード』への移行を示すことであり、第2は、これら3つの機能は独立しているのではなく、密接に関連することで一種の発話スタイルを形成していることである。

後者は、顔文字は基本的に表情を模した形からなるにも関わらず、引用10が示しているように、先に決まっているのは顔文字を付与していることであり、どのような表情の顔文字であるのかは後で決められることから示される。つまり、通常の状態では装飾というスタイルが優先され、どのような感情の顔文字が付与されるかは自立的使用者にとっては2次的な意味しか持たないと考えられる。

引用10 (Eさん)

Q：女性は絵文字は良く使います？

E: そうですね、久しぶりの友達とか、そんなしょっちゅうじゃない人とかやったら結構使うと思いますけど、たまにめんどくさくなったりしたらあまり多用しないとか、でもあんまりないとそれも素っ気ないかなと思って一個ぐらいは入れとこかなみたいな…。

Q: 気遣いなんですかね…。

E: なんとなくイメージが、受ける感じが、絵文字があるほうが丸くなるっていうか、そういう感じはするんで、ま一個ぐらいは入れようかなって感じですね。

顔文字を使い始める契機

本論では、顔文字の使用が単に親密さや感情の表出だけではなくスタイルである可能性について述べてきた。では、どのようにこのスタイルを習得するのか。引用11と12は、知覚された周りの環境の変化がスタイルの変化に影響を及ぼすことを示唆している。

引用11 (Bさん)

Q: いつぐらいから顔文字を使い始めたかって覚えてますか? 携帯持ってすぐ?

B: 顔文字とか、絵文字とかもそうなんですけど大学入ってからですかね。

Q: それまではなぜ使わなかった?

B: 使う人がいなかった。僕の中で顔文字使うっていう文化がなかった。大学入って、特に女の子ですかね、めっちゃめっちゃ使ってる人いたんで、はじめは抵抗あったんですけど使うようになりました。

Q: なぜ抵抗がなくなったんでしょう?

B: みんなが使ってるっていうのもあるし、使い出すと結構便利になっていう…。気持ちも伝わって「。」とかで終わるとちよっと…。

引用12 (Gさん)

Q: 最初に使ったときの事って覚えてますか?

G: 顔文字を?

Q: つまり、携帯を持って、すぐ使ったのか? しばらく時間があつたのか?

G: え、メールの、僕、大学入ってから持ったんですけど…。多分、最初のころは使ってなかった。顔文字の本当に初期の頃は存在すら知らなかった。テレビとかで女子校生とかが使っている、っていうのがあって「自分にはあまり関係ないな」、「俺の住んでるところとは関係ないな」と思ったら、結構回りでも使い始めて、それで、いつの間にか、使ってみよっかな、と思って使い始めたんだと思いますけど…。でも、いつ使ったのかとかわかんないかなあと…。

顔文字使用の男女差再考

本論では、自立的使用者、自立的不使用者、従属的使用者の3種類のスタイルがあることを示した。もちろんこれには程度の違いがあるので一概には言えないが、本研究に参加した7名の男性のうち、1名だけが自立的使用者であり、従属的使用者が2名、残りの4名が自立的不使用者であった。他方、7名の女性のうち、5名は自立的使用者であり、残りの2名が自立的不使用者であった。顔文字の使用量について統計的な技法で算出される男女差は、このような選択しているスタイルの比率を間接的に反映していると考えられる。今後は、男女差よりも、採用しているスタイルと他の要因との関係が検討されるほうがより有用であろう。

まとめと本研究が顔文字研究に与える示唆

本論では、発話スタイルという概念を援用し、人がどのような判断に基づいて顔文字を付けるか否かを決定しているのかを検討とした。その結果、感情の表出は重要な要素ではあるが、どのような感情の顔文字が表出されるかは二次的な意味しか持たずに常に顔文字を用いるスタイルをとる人と、常に顔文字を用いないというスタイルをとる人がいる可能性が示唆された。本論では、それらの人を顔文字の自立的使用者、自立的不使用者と呼んだ。しかし、同時に、その両者のスタイルの間を柔軟に行き来することで円滑なコミュニケーションをとる従属的使用という方略の存在も見出された。

また、顔文字は、相手との関係の調整や維持のためにも用いられ、同じ相手に対しても状況によっては使用されたりされなかったりした。

このように、基本的なスタイルに個人差があるにもかかわらず状況によって使い分けられ、また、親和的な雰囲気を作り出す機能を持つという意味で、顔文字は、現代方言(小林, 2004)に近いと思われる。小林(2004)によると、現代方言とは、従来の方言のように「システム(言語体系そのもの)」ではなく、「スタイル(私的な場面で用いられる一種の文体)」であり、その

機能としては「相手の確認（同一地域社会に帰属する親しい仲間同士であることの確認）」と「発話態度の表明（その場の会話を気取らないにすぎたものにしたという意思表示）」がある。これらの点は、顔文字が持つ特徴と類似している。従来の顔文字研究は、このようなスタイルの差や状況による判断の違いには鋭敏ではなかったと考えられる。今後は、個人のスタイルを考慮した実験や調査を検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 荒川 歩 2004 感情と顔文字の研究：受信者が感じていると思われる感情状態が送信者の顔文字使用に与える影響 日本認知科学会第21回大会発表論文集 (pp.128-129.)
- 荒川 歩 準備中 からの思考の社会的構築論。
- 荒川 歩・鈴木直人 2004 謝罪時に付与された顔文字が受け手の感情に与える効果 対人社会心理学研究, 4, 128-133.
- Flick, U 2002 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) 質的研究入門：〈人間科学〉のための方法論 東京：春秋社。
(Flick, U 2002 *Qualitative Forschung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt)
- 井上みづほ・藤巻美菜子・石崎 俊 1997 電子メール文における感情表現の解析システムについて—感情表現の収集・分類・解析— 電子通信学会技術報告, T L 96-11, 1-8.
- 川喜田二郎 1967 発想法：創造性開発のために 東京：中央公論社。
- Kiesler, S., Zubrow, D., Moses, A. M., & Geller, V. 1985 Affect in computer-mediated communication: An experiment in synchronous terminal to terminal discussion. *Human-Computer Interaction*, 1, 77-104.
- 小林 隆 2004 アクセサリーとしての現代方言 社会言語科学, 7, 105-107.
- Lakoff, R. 1990 言語と性：英語における女の地位 東京：有信堂高文社。
(Lakoff, R. 1975 *Language and woman's place*. New York: Harper & Row.)
- Leininger, M. M. 1997 近藤潤子・伊藤和弘 (訳) 看護における質的研究 東京：医学書院。
(Leininger, M. M. 1985 *Qualitative research methods in nursing*. Philadelphia: Saunders)
- 三牧陽子 2002 待遇レベル管理から見た日本語母語話者間のポライトネス表示：初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」 社会言語科学, 5, 56-74.
- 三宅喜美代 2002 ケータイメールを利用する若者の対人関係：本学学生のアンケート調査の分析 大垣女子短期大学研究紀要, 43, 49-59.
- 無藤 隆, 南 博文, サトウタツヤ, やまだようこ, 麻生 武 (編集) ワードマップ質の心理学：創造的に活用するコツ 東京：新曜社。
- 村瀬高敏・井上果子 2003 携帯電話のメール利用とその効果—男女差の検討 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要, 3, 101-118.
- 中丸 茂 2002 顔文字が文章の信頼度に及ぼす影響 駒沢社会学研究, 34, 91-114.
- 中村 功 2001 携帯メールの人間関係 東京大学社会情報研究所 (編) 日本人の情報行動2000 東京：東京大学出版会 (pp.285-303.)
- Rice, R. E. & Love, G. 1987 Electronic emotion: Socioemotional content in a computer-mediated network. *Communication Research*, 14, 85-108.
- Rivera, K., Cooke, N. J., & Bauhs, A. 1996 The effects of emotional icons on remote communication. *Proceedings of 1996 of ACM Conference on Computer-Human Interaction*. Retrieved June 8, 2004, http://www.acm.org/sigchi/ch96/proceedings/intpost/Rivera/rk_txt.htm.
- 西條剛央 2003 「構造構成的質の心理学」の構築 質的心理学研究, 2, 164-186.

- 斎藤清二・岸本寛史 2003 ナラティブ・ベイス
ト・メディスンの実践 東京：金剛出版。
- 佐藤郁哉 2002 フィールドワークの技法：問
いを育てる，仮説をきたえる 東京：新曜社。
- サトウタツヤ 2004 心理学からみた質的研究
サトウタツヤ（編） フィールド・質的・カ
ルチュラル：対人援助の実践と研究を支える
技法と理論 京都：立命館大学人間科学研究
所 (pp.3-43.)
- 塩瀬隆之・加藤 浩・片井 修 2004 ヒュー
マンインタフェース分野にとっての質的研究
の意義：その期待と疑問，そして展望 ヒュー
マンインタフェース学会論文誌，**6**，147-159.
- 鈴木淳子 2002 調査的面接の技法 京都：ナ
カニシヤ出版。
- 高橋秀明 1993 プロトコルからわかること，
わからないこと 海保博之・原田悦子（編）
プロトコル分析入門 東京：新曜社。
- 竹原卓真・佐藤直樹 2003 顔文字の有無によ
るメッセージの印象の違いについて 日本顔
学会誌，**3**，83-87.
- 竹原卓真・佐藤直樹 印刷中 喜びの顔文字に
よる感情伝達の促進効果 日本顔学会誌。
- Tannen, D. 1984 Conversational style:
analyzing talk among friends. Norwood,
N.J.: Ablex Pub. Corp.
- 戸梶亜紀彦 1997 コンピュータ上でのコミュ
ニケーションにみられる情緒表現に関する研
究—情緒表出記号の使用方法について— 広
島県立大学紀要，**8**，125-138.
- 都築誉史・木村泰之 2000 大学生におけるメ
ディア・コミュニケーションの心理的特性に
関する研究：対面，携帯電話，携帯メール条
件の比較 応用社会学研究，**42**，15-24.
- Walther, J. B. & D'Addario, K. P. 2001 The
impacts of emoticons on message
interpretation in computer-mediated
communication. *Social Science Computer
Review*, **19**，324-347.
- Witmer, D. & Katzman, S. 1997 On-Line
Smiles: Does Gender Make a Difference in
the Use of Graphic Accents? *Journal of
Computer-mediated Communication*, **2**.
Retrieved June 8, 2004, <http://www.ascusc.org/jcmc/vol2/issue4/witmer1.html>
- Wolf, A. 2000 Emotional expression online:
Gender differences in emoticon use.
CyberPsychology & Behavior, **3**，827-833.
- やまだようこ 1986 モデル構成をめざす現場
心理学の方法論 愛知淑徳短期大学研究紀要，
25，31-51.
- （やまだようこ（編） 1997 ^{フィールド}現場心理学の
発想 東京：新曜社）に再録。
- 山口英彦・城 仁士 2000 電子コミュニティ
におけるエモティコンの役割 神戸大学発達
科学部研究紀要，**8**，131-145.